

るは、たばこを製して世に商産とす。子も一とせこゝに遊びて、吉野の春に増るたばこの秋を、おなじ名の花とたばこを競ぶれば薫りよしの、是は名葉。」と記する。

ヨシノオホスギ 吉野の大杉 石川郡吉野のうち下吉野の西北端に在つて、里人倒杉又は御佛供杉といひ、目廻七米八、樹高一八米。枝葉横に長く延び、幹の中央太きを以て奇觀を呈する。この地は古へ祇陀寺のあつた所といふ。昭和十三年六月天然記念物に指定せられた。

ヨシノハナ 芳野の花 一册。小松の俳人佛仙編。一册。天明八年稿本。佛仙が或人の需によつて、望芳野花等の自己の吟詠を書き興へたもので、卷末に北海老人とあるもその別號である。

ヨシノヤヘエ 吉野の彌兵衛 その祖源次郎は越前浪人であつたが、當時亡所となつてゐた石川郡吉野・佐良・瀬波・市原・木滑・中宮と能美郡尾添を村上頼勝が併合しようとした時、之を前田利家に註進して再興し、扶持高七町を受けた。二代目を彌兵衛といひ、三代目は若名彌三、後に彌兵衛であつたが、利長の時に十村となり、五人扶持を受け、四代彌兵衛之を襲いで承應三年田地九段に改められ、明暦二年老齢を以て十村を除かれた。寛文十一年病死。翌年五代目彌七郎持高の内九反を扶持せられ、延寶八年三月歿。その後は平三郎が繼いだ。十村は三代四代だけであつた。

ヨシノヒコスケ 吉野彦助 羽咋郡杉野屋の人。萬治三年尾長村の内に新田四十石を開墾し、後尾長に隣接する呂知湯邊に、飯山川

筋八十間を改鑿することを出願したが、寛文三年改作奉行等實地を踏査し、川筋改修と共に新田の開墾を命じた。彦助乃ち役を督し、六十石餘の地を得、五年蒔は之を堀替新村と命名した。彦助は更に同年三十石、七年四十石、十年二十石、十二年三十石、延寶三年十五石等の新田を得、延寶七年以後尙十數回の埋立により、堀替新村にて總高五百八十石、隣村にて二百石の開墾に成功したから、世人之を千石彦助と呼んだ。元祿十四年十一月歿。

ヨシノブ 吉信 羽咋郡杉野屋の百姓。能登誌に、『杉野屋村昔菅原村と一村なりし頃、菅原の國武・左官兼曾との兩人神託の告に任せ、京都北野へ來りしが、其頃北野の坊へも北野の百姓吉信等二人へ夢想有て、能州菅原村より我を迎に來る也。其節供して參るべしとありける。果して符節を合したる如くなれば、即て吉信諸共に尊像の御供して當國へ下り、吉信は此地に留り永く居住し、今に子孫殘れり。』と記する。

ヨシノヤ 吉野屋 羽咋郡呂知院内菅原庄に屬する部落。吉野屋の名は、大永六年十月一宮社務職年貢米錢納帳に見える。

ヨシノリ 義則 加賀の刀工。加州義則と切る。天正頃。

ヨシハラ 吉原 能美郡板津郷に屬する部落。郷村名義抄に、昔は熊田村・吉原村の二つであつたが、いつの頃よりか吉原村のみになつた。正保・寛文・貞享の高辻帳には吉原村とあると記する。

ヨシハラ 吉原 河北郡井上庄に屬する部落。龜尾記に、此の村に昔大寺があつたとて、大門・門の裏などの字があり、かくたう坊・明

覺坊・じぢん坊・たぼん坊・不動坊・りやうぢ坊・しよちん坊等の寺跡があると記する。又文化八年他國出制禁産物記に、此の村に白銀土を産して御細工所の御用となることを載せてゐる。

ヨシハラカマヤ 吉原釜屋 能美郡板津郷に屬する部落。

ヨシハラキコウ 吉原紀行 一册。牧昌左衛門忠輔著。文化三年水無月、江戸藩邸から同僚に伴はれ、納涼の爲乗船して兩國橋に至り、吉原を見物した記事である。所々で發句などが作られてゐる。

ヨシハラジロベエ 吉原次郎兵衛 天正八年柴田勝家が加賀の一向宗徒を滅ぼした後、吉原次郎兵衛を能美郡別宮城主として置いたが、翌九年三月小馬揃の行はれるに當つて北國の諸將が京都に上つた虚に乗じ、また一揆は起つて次郎兵衛を討取つた。

ヨシヒサオツメマイブギヨウ 吉久御詰米奉行 吉久は越中射水郡の地。寛文元年松江次郎兵衛・杉岡伊兵衛・水野半左衛門・齋藤伊左衛門の命ぜられたのが御詰米奉行の初であらう。延寶中に至つては全く一人役となつた。

ヨシフチ 吉藤 ↓センコウジ 専光寺。ヨシフチゴウ 吉藤郷 眞政和尚行業記に、『和尚諱圓忍。其字眞政。賀州石川郡吉藤郷人。』とある。こゝに吉藤郷とあるは、吉藤村の意で、さる郷名はない。

ヨシフチゴボウ 吉藤御坊 ↓センコウジ 専光寺。ヨシミウチ 吉見氏 (一)吉見氏と越前興國の初能登の守護は吉見大藏大輔頼隆であつたが、屢越前の宮方と干戈を交へた。時に

能登の士得江九郎頼員といふもの、頼隆に従うて出征し、興國元年(曆應三)八月には畑時能の據つた越前三國湊千手寺城を、十月には同國の畑城及び糸崎城を陥れて、武家方に重きを爲した。

(二)吉見氏と越中興國五年(康永三)越中の井上宮内少輔俊清、宮方に屬して兵を擧げた。是に於いて足利尊氏は、十月廿五日吉見頼隆に、能登の地頭家人を率ゐて之を撃攘すべきことを命じ、十一月十六日頼隆は得江頼員を召したから、頼員は翌年三月進發し所々に戦つた。此の年七月十一日俊清大擧して、吉見氏の軍を越中高槻及び滑河に襲うたが、頼員は、能登の得田次郎左衛門入道素章(諱は章仲)代であつた子息又五郎章名と共に奮闘して驅逐した。然るに正平元年(貞和二)俊清の勢力又振ひ、三月六日能登に侵入し、羽咋郡富來院木尾嶽に據つたので、頼隆の子掃部助氏頼は越中より歸り、五月四日木尾嶽を陥落せしめた。俊清乃ち越中に退き、新川郡松倉及び水尾に於いて吉見軍と對峙したが、二十日吉見軍水尾城を攻め、得田章名は先頭に進んで功を樹てた。而して同年閏九月俊清は一たび降を乞うたが、正平二年(貞和三)又松倉に旗幟を翻したから、翌年尊氏の催促に應じたる吉見掃部助氏頼は得田素章と共に出陣し、十月十二日之を陥れた。

(三)足利氏内訌の餘波一正平五年(觀應元)足利直義は兄尊氏と隙を構へたが、この争は早くも地方に傳播し、越中の桃井直常は井上布袋丸(俊清の後であらう)及び富來彦十郎俊行と共に直義に屬し、能登の得江石王丸(頼員の子であらう)は尊氏方となつて、公武の關

能登の士得江九郎頼員といふもの、頼隆に従うて出征し、興國元年(曆應三)八月には畑時能の據つた越前三國湊千手寺城を、十月には同國の畑城及び糸崎城を陥れて、武家方に重きを爲した。

(二)吉見氏と越中興國五年(康永三)越中の井上宮内少輔俊清、宮方に屬して兵を擧げた。是に於いて足利尊氏は、十月廿五日吉見頼隆に、能登の地頭家人を率ゐて之を撃攘すべきことを命じ、十一月十六日頼隆は得江頼員を召したから、頼員は翌年三月進發し所々に戦つた。此の年七月十一日俊清大擧して、吉見氏の軍を越中高槻及び滑河に襲うたが、頼員は、能登の得田次郎左衛門入道素章(諱は章仲)代であつた子息又五郎章名と共に奮闘して驅逐した。然るに正平元年(貞和二)俊清の勢力又振ひ、三月六日能登に侵入し、羽咋郡富來院木尾嶽に據つたので、頼隆の子掃部助氏頼は越中より歸り、五月四日木尾嶽を陥落せしめた。俊清乃ち越中に退き、新川郡松倉及び水尾に於いて吉見軍と對峙したが、二十日吉見軍水尾城を攻め、得田章名は先頭に進んで功を樹てた。而して同年閏九月俊清は一たび降を乞うたが、正平二年(貞和三)又松倉に旗幟を翻したから、翌年尊氏の催促に應じたる吉見掃部助氏頼は得田素章と共に出陣し、十月十二日之を陥れた。

(三)足利氏内訌の餘波一正平五年(觀應元)足利直義は兄尊氏と隙を構へたが、この争は早くも地方に傳播し、越中の桃井直常は井上布袋丸(俊清の後であらう)及び富來彦十郎俊行と共に直義に屬し、能登の得江石王丸(頼員の子であらう)は尊氏方となつて、公武の關

能登の士得江九郎頼員といふもの、頼隆に従うて出征し、興國元年(曆應三)八月には畑時能の據つた越前三國湊千手寺城を、十月には同國の畑城及び糸崎城を陥れて、武家方に重きを爲した。

(二)吉見氏と越中興國五年(康永三)越中の井上宮内少輔俊清、宮方に屬して兵を擧げた。是に於いて足利尊氏は、十月廿五日吉見頼隆に、能登の地頭家人を率ゐて之を撃攘すべきことを命じ、十一月十六日頼隆は得江頼員を召したから、頼員は翌年三月進發し所々に戦つた。此の年七月十一日俊清大擧して、吉見氏の軍を越中高槻及び滑河に襲うたが、頼員は、能登の得田次郎左衛門入道素章(諱は章仲)代であつた子息又五郎章名と共に奮闘して驅逐した。然るに正平元年(貞和二)俊清の勢力又振ひ、三月六日能登に侵入し、羽咋郡富來院木尾嶽に據つたので、頼隆の子掃部助氏頼は越中より歸り、五月四日木尾嶽を陥落せしめた。俊清乃ち越中に退き、新川郡松倉及び水尾に於いて吉見軍と對峙したが、二十日吉見軍水尾城を攻め、得田章名は先頭に進んで功を樹てた。而して同年閏九月俊清は一たび降を乞うたが、正平二年(貞和三)又松倉に旗幟を翻したから、翌年尊氏の催促に應じたる吉見掃部助氏頼は得田素章と共に出陣し、十月十二日之を陥れた。